

これからの滋賀の県立高校の在り方に関する意見聴取について (令和3年8月～9月聴取)

I. 意見聴取の実施状況について	P 2
II. 意見聴取の主な結果概要	P 3
1. 市町関係	
(1) 市町首長	P 3
(2) 市町教育長	P 3
2. 学校関係	
(1) 県立学校長/県立学校副校長・教頭	P 4
(2) 市町立中学校長・義務教育学校長	P 9
(3) 私立高等学校長 等	P 12

I. 意見聴取の実施状況について

1. 市町関係

(1) 市町首長

- 実 施 市長会（令和3年8月24日）、町村会（令和3年8月25日）
- 内 容 『これからの県立高等学校の在り方について 答申（素案）』を示し、意見聴取

(2) 市町教育長

- 実 施 令和3年8月から9月
- 内 容 『これからの県立高等学校の在り方について 答申（素案）』を示し、意見を記載

2. 学校関係

(1) 県立学校長/県立学校副校長・教頭

- 実 施 令和3年8月から9月
- 内 容 『これからの県立高等学校の在り方について 答申（素案）』を示し、意見を記載

(2) 市町立中学校長・義務教育学校長

- 実 施 令和3年8月から9月
- 内 容 『これからの県立高等学校の在り方について 答申（素案）』を示し、意見を記載

(3) 私立高等学校長 等

- 実 施 令和3年8月から9月
- 内 容 『これからの県立高等学校の在り方について 答申（素案）』を示し、意見を記載

II. これからの滋賀の県立高校の在り方に関する意見聴取の主な結果概要

1. 市町関係

(1) 市町首長

- ・地域別協議会をどういう単位にするかは協議していただきたい。
- ・市内の県立高校の在り方に危機感をもっている。定員を減らしていくだけなら負のスパイラルになるだろうと危惧している。
- ・統廃合の議論はいつぐらいにあるのか。今回はないとは聞いているが、安心できるのかどうか。いつかは統廃合があると思っているが、そのことが織り込まれるなら事前に伝えてほしい。
- ・中学生が4割減少しているとなると、統廃合は避けて通れない、引き延ばしできないと思う。地域の状況もみて、残す高校と、地域に3つも4つもある高校から減らすというような方向性は示してほしい。

(2) 市町教育長

<「IV 将来を見据えた整理」について>

①県立高等学校と私学との関係について

- ・生徒数の減少が避けられない中、県立高校としての公共性を担保する一方で、私学に負けない独自性の発揮、私学との共存や私学へ任せていく分野についても検討する必要があるのではないかと考える。
- ・私学の強みや特色化等の強い周知の取組等については参考にすべき。
- ・従前より、中学校現場では、県立高校よりも私立高校の方が支援等の配慮が必要な生徒に対する対応が手厚いとの認識がある。それに加え、令和2年度からの高等学校等就学支援金制度の拡充により、中学校現場としてはさらに私立高校への進学を勧める傾向にある。県立高校には、行っていただいている支援や配慮等の情報が積極的に中学校現場に伝わり、進路指導に生かされるようにしてもらいたい。

②県立高等学校の学校規模について

- ・答申(素案)にもあるように、高校規模に関わらず、特色ある教育活動の展開、地域の実態や需要等を踏まえた魅力ある学校づくりなど、生徒が主体的かつ意欲的に学べる環境を整備することが重要であるとする。
- ・規模の大きい高校はきめ細かな取組ができないわけではなく、規模の小さい高校が学校活力に富まないわけではない。規模の大小にとらわれず、特色ある教育活動を展開することで、生徒たちが自分の意思で高校を選択し、主体的かつ意欲的に学ぶことが重要である。そして、高校も、小中学校で育ててきた「生きる力」を育む場であり、好奇心や探求心をさらに発展させる場でもあることから、生徒の学びを充実させる仕組みづくりだけでなく、自ら学び続ける教職員の育成にも力を注ぐことが大切である。
- ・地域との連携・協働による新しい学校づくりは、学級減に伴う教職員数の減少等から教職員の負担が増大することも考えられる。教職員の理解を得て、学校の魅力化や特色化を図るためにも、教職員の働き方改革や負担軽減を推進するための方策も必要である。
- ・将来的な生徒数減少は避けられない状況で、学校規模をアピールポイントに変えて生徒のニーズに合う学校づくりを進めていく必要がある。
- ・社会性や豊かな人間性を育むためには、集団の中で多くの仲間たちと学ぶことができる環境が必要である。適正規模としては1学年少なくとも4学級程度の学校規模を確保することが望ましい。早急に適正規模の確保につとめ、学校の活力向上を図っていただきたい。
- ・本市にはものづくり企業が集積し、13年連続で県内トップの製造品出荷額を誇り県内有数の内陸工業地として発展してきたが、直面する課題は団塊世代の退職による技術者不足である。よって、電気や機械等の専門性の高い知識を習得できる系列や、IT等を活用したコンピュータグラフィックデザインなどを学べる他校にない魅力的な就職を見据えた学科の創設が必要である。地域の実態や需要等を考えた上での魅力づくりは重要である。

③将来に向けた議論の必要性について

- ・来年度から中学校でのGIGAスクール構想を経た生徒たちが入学してくる。BYODの導入と合わせてICTの環境の整備、授業形態等の改革を早急に進めていただきたい。
- ・「学校だけに限らない多くの学びの場を設定する」などの今後の在り方を論議する必要がある。
- ・地域に高校を残し、また適正定員の確保という視点で、規模が小さい複数の高校を一つの高校とみなした大学のキャンパスのような学びの場には賛成であるが、最終的に単に高校再編となることは避けていただきたい。
- ・キャンパス制はよいアイデアであるとする。2~3校をまとめて一つ高校として、「〇〇高校△△キャンパス」という呼称で校舎を現存のまま残せば、イメージアップにも繋がる。
- ・近年、工業や農業といった普通科以外の学校を希望する生徒が減っており普通科志向が高まっている。これらは、大学進学を見据えたうえでの判断でもあるが、一方で「この学校は他の学校と違い、こんな体験ができて自分を伸ばせそう」といった魅力となる情報が分かりにくかったり、示されていないため、なんとなく普通科を選んでいる状況であることも一つの要因であると考えられる。中学生が進路選択をするときに、各高校にどんな魅力があるのかは大きな材料であり、その魅力が自分の思いに合うものであればなおさらである。中学生が惹きつけられる学校独自の魅力を創設していただき、中学生に積極的に伝わるようにアピールしてもらいたい。
- ・全県一区になり、県南部へ進学希望者が集中していることを危惧している。地域の活性化、地元への愛着を育てるため、地域の実情・強みを分析し、何が学べ、どのような力をつけられるのかを明確にし、湖北・湖東地域、湖西地域の未来を担う人材を育成する魅力ある高校づくりを希望する。

④入学者選抜の在り方について

- ・家族の形が複雑多様化している中、全ての家庭環境に対応できるような選抜の再検討もお願いしたい。
- ・推薦選抜、特色選抜、スポーツ・文化芸術推薦選抜、一般選抜、二次選抜という異なる入試の機会が受検生に与えられていることにより、受検生の能力が多面的に評価され、また再挑戦の機会が保障されているというメリットがある。一方で、入試事務の煩雑化や長期化というデメリットも生じている。

<これからの県立高等学校の在り方全般について>

- ・公教育の大前提に公正・公平ということがあります。滋賀県のどこで生まれ育っても公平に高等教育が受けられなければなりません。遠方から高い電車賃を払わなければ通えないようなことではいけないと思います。
- ・中高生へのキャリア教育の充実を図りながら、その高校を卒業したらどのような自分になれるのか明確にイメージできるような特色化・高度化を進め、発信する必要がある。次の高等教育へつなぐ十方向きの人間を育てるのではなく、例えば、コンピュータのプログラミングに特化したような狭く深い教育課程を編成して、その道のエキスパートを育てるような大胆さも必要であると考えます。
- ・普通科には「キャリア教育の一環としての選択授業」を積極的に取り入れることで、各校の特色を生かしていただきたい。例えば、「福祉」「環境」「保育」「歴史観光」「農業」「スポーツ」などの分野を自分で選択して学ぶ機会をつくり、自分の生き方を考えるきっかけとしてほしい。
- ・進学やスポーツ、芸術等において、滋賀の子どもの優れた能力を発揮できる高校の在り方を検討する必要であると考えます。(秀でた能力を有する滋賀の子どもが、県外に伸長の場を求めなくても、県立高校でその能力を伸ばしていくことができる環境の整備)
- ・地域連携を進めるには、高校教職員が所在地の市町の状況等について、市町の各部署との情報共有に取り組むことが重要で、市町の現状や課題を知り、どの分野で協働した取組が必要か高校側からのアプローチが必要。
- ・県立高校進学者の中にも特別な支援を要する生徒が増加していることから、高校の特色として支援体制の充実を積極的に図る。また、1学級40人にこだわらず、少人数でのきめ細かな取組ができる学校等を設置する。

2. 学校関係

(1) 県立学校長/県立学校副校長・教頭 (県立学校長)

<「IV 将来を見据えた整理」について>

①県立高等学校と私学との関係について

- ・私学との連携・情報共有については、当然不可欠ですが、互いに長期的展望を共有していかないと、公立・私学とも共倒れになってしまうので、長期的展望の中で棲み分けを確認していく必要があると思います。
- ・私学は独自のスクールポリシーに基づいた小回りの利く教育活動により、社会の変化や生徒のニーズに応じた学びを提供してきた。多種多様な生徒の要求に応えるべく多くの学科を併設することや、地域に根ざした公立ならではの特色を生かした学校づくりが課題となるのではないかな。
- ・私立は高校独自の裁量で事を進めることができるため、より特色化が明確になり、即実現可能な教育活動を展開することができる。一方、公立は教育委員会との協議など時間がかかり、実現できればいいがそうでないこともあり、学校独自の特色や魅力あるカリキュラムの開発に時間がかかる。また資金面でも制約されることもある。公立の学校では、より校長の裁量が高められるような仕組みをつくるのが大切だと感じる。
- ・近年、一層私学の優位性が強くなっているように感じる。私学の経済的負担が軽減される状況では、この傾向が益々顕著になるものと思われる。この状況を打開するためには、中等教育学校の設立、中高一貫教育校の増設、公立中高での協働授業や連携事業など公立中高の関係強化の方策が求められる。
- ・定員については、私学にとって「経営」の観点もあり、さらに今後さらに京都私学との関係も出てくるように思われ、合意を得るようなことは難しいのではないかな。仮に県内私学の定員を減らせても、そのことで京都私学へ出るが増えることにならないかな。

②県立高等学校の学校規模について

- ・現任校は各学年3学級の小規模校だが、都市部にある高校に比べると登下校時に混雑しないため交通指導や安全衛生指導が効率的に実施できる。また、学年主任が学年全体の生徒を、業務上で必要となる教職員は全校生徒一人ひとりの顔と名前を覚えることができ、日常の指導や支援において、かつては期待していなかったメリットが生じていると思う。現状では、それぞれの学校規模にメリット、デメリットがあると実感しているのではないかな。
- ・この方向性に同意する。特に部活動については、人数が必要な団体競技において、例えば野球などは合同チームという活動もできるが、できれば単独で出場できることがよいのではないかな。ただ、部活動全体が社会体育化の方向であるのかを含め検討する必要があると考えます。
- ・令和16年度には県内中学校および義務教育学校の卒業生数が大幅に減少する。1学級の定員を見直すことと併せて、高校再編についても検討することもやむを得ないと考えます。
- ・小規模校の統合の視点も必要かもしれないが、県立学校は地域活性化につながる大きな役割なので、単純に統合していくのもどうか。特に、旧郡部に位置する学校は単純に減らすことは難しい。
- ・小規模校について、今後の生徒数減少に伴い、例えば80人定員、120人定員としても受検者数がこの定員を大きく下回ってくる場合も想定される。実質どの程度の定員までを想定して小規模校を存続していくのか。
- ・小規模校はICT機器等を活用し大規模校との遠隔授業により単位の認定できるようにすることも特色化の一つ

と考える。また、小規模校が実施している地域との連携に大規模校の生徒が「総合的な探究の時間」等で参加し取り組めるようにする等、ICTを活用した学校間連携も必要と考える。

- ・受け入れた生徒の力を伸ばす教育をするうえで、1学級の生徒数を一律40人にするのではなく、大規模校は44人、小規模校では30人等と学級定数を変えてはどうか。
- ・現在ある県立高校の数を維持するのであれば、1学級当たりの生徒数を減ずるのが良いと思います。
- ・多くの小規模校が生まれた場合、生徒数は減っても文化祭や体育祭、修学旅行等の学校行事を減らすわけにはいかず、運営や対応等あらゆる場面で規模に関係なく人員を配置する必要がある。生徒数に応じて教員数が減るなら、必然的に教員に一層の業務負担を強いることになり、働き方改革という点からも問題となる。また、部活動の廃部も必要になるが、運営費用（生徒会費やPTA会費）の面からも生徒に十分な活動をさせられなくなる。
- ・生徒数減少により生じる課題の大半は、学校機能の維持が困難になる小規模校に凝縮される。統合再編や学校規模の平準化が図られる方向性は示されておらず、その方向性がないのであれば、県立高校、特に普通科系学科をもつ高校は、大規模校と小規模校でその在り方が二極化していくことが想定され、その中で特色化・魅力化であることを示す必要があるのではないかと考える。
- ・大規模校と小規模校への言及はあるが、統廃合についての見通しを記載しなくてもいいのか。
- ・「規模が小さい学校は、地域との連携がしやすい」とあるが、実際にそうなのか。小規模校の経営は非常に大変な状況に陥っている。またこのことによって、今後小規模校が取り組まなければならない課題になってしまうと危惧する。具体的な支援の必要性を感じる。
- ・中高一貫を維持しながらも、高校で新学科やコースを設置し、内進生・高入生の両方が希望できるクラス編成の工夫ができるようにしてほしい。

③将来に向けた議論の必要性について

- ・「進学を目指す学校」「総合学科を持つ学校」「チャレンジスクール」「中高一貫教育校」等の枠組みを設けることにより、特色化による目指す方向を示すとわかりやすいと思われる。中学生にとって分かりやすい高校の選択肢を提示し、「その地域の教員がその地域の学校を育てる」くらいの感覚で学校づくりを行うなら、全県一区であっても地域の学校として地域とともに成長していけるのではないかと考えています。
- ・小規模な複数の高校を一つの高校とみなす取組は、部活動の在り方とあわせて有効な案と考える。また、大規模校も連携の中に加わり、小規模校の生徒が大規模校で実施されている魅力ある授業をオンラインなどで受講したり、普通科の生徒が他校の専門学科の授業をオンラインなどで受講したりできる取組も、魅力化とともに学びの機会の均等といった視点から検討をお願いしたい。
- ・「規模が小さい複数の高等学校を一つの高等学校とみなし、モデル的に実施する」という点については、おもしろい発想ではあると思うが現実的には難しいと思う。複数校を束ねる校長の負担は大きい。
- ・規模が小さい近隣の学校間で単位互換制度等を取り入れ、1つの学校として機能させる試みは、ぜひ実現させていただきたい。高校野球でも、自校でチームが作れない学校が多くなってきている。「学校」という枠の考え方を大きく転換しなければならない時期に来ていると思う。
- ・市町をはじめ関係者と議論して方向を決めていくことは大切であると考えますが、そこでの意見を尊重しすぎると、結局は特色が失われていくのではないかと危惧されます。県のリーダーシップに期待します。
- ・これから生徒数の減少が見込まれる状況の中、県立高校の再編、統合については何も書かれていない。今後、10年から15年先にその可能性が限りなくゼロならば、このままの記述でよいと思うが、再編、統合の話が出てくる可能性があるのならば、そのことについて（少しいいので）言及しておくのがよいと思う。
- ・地域との協働ありきではなく、なぜ協働する必要があるのか。協働した結果、生徒にどのような力が身につくのか。生徒や保護者にとって、どのようなメリットがあるのか。そのためにはどのような協働が必要なのか等を明確にしていく必要があると考える。
- ・現在の高等学校制度は、早期に進路を決定してしまわず、リベラルアーツを中心とする普通教育を通してさまざまな可能性の中から将来の適性を見出していくことを基本理念としており、この理念に基づいた普通科高校をどこまで専門分化させることが適切か、しっかりと議論することが必要だと考える。
- ・魅力ある学校づくりにあたって、欠かせない視点として、施設整備や人材配置がある。教育内容を大きく刷新するには、施設整備や備品購入等も含むハード面の整備計画や人的保障も必要。
- ・生徒が安全で安心して学びを深めるため、すべての県立学校の施設・設備の改善について、充実した学校環境の整備について議論をお願いします。市町の小中学校の方が学校環境は充実していると感じています。
- ・人、物、金をかけず、号令だけの魅力化では、教育委員会や各学校の自己満足に終わり、県民（保護者・生徒）には届かないと思う。
- ・年々、中学校特別支援学級からの高校への進学は増加し、小中高どの校種においても特別に配慮の必要な児童生徒数は増加している。よって、発達障害の児童生徒への通級指導教室の活用が重要になってくると思う。
- ・高校への進学を希望する特別な教育的支援の必要な生徒は増加している。通級指導教室が設置された県立高校は愛知高校だけだが、支援の必要な生徒は確実に他校にも存在するものと考え。愛知高校で進められてきた通級指導教室の考え方をベースに、全県の高校で通級指導教室の設置拡充の検討が必要だと考える。
- ・学校規模にかかわらず、支援を要する生徒はいる。特別支援学校がセンター的役割を担い、特別支援学校（知肢養護学校）1校が分担する高校を決め（福祉圏域毎）、特別支援学校の特別支援教育コーディネーターによる分担された学校への週1回訪問や、高校のコーディネーターとの連携、通級による指導として該当する生徒との面談や、必要に応じて自立活動の取組を実施する等、具体的に早急に実施していく必要性を強く感じている。

- ・高等養護学校や高等部分教室が規模の小さい（小さくなる）高校に併設されてきている状況には違和感を覚える。規模を維持することが困難になるという予想に対して、安易に高等養護や分教室併設という発想にならないように願う。
- ・障害のある生徒とない生徒が、ともに安心した学校生活を送れるように、高校と特別支援学校との連携強化を進めることが大切である。とりわけ、発達障害や高機能自閉症、アスペルガー障害等の知的障害を有しない生徒への対応について、特別支援学校との連携を深めることが大切である。
- ・通信制高校の役割として、不登校生徒等、教育的支援を必要とする生徒だけでなく、学校生活以外の時間が多いことを活用し、受験対策や資格習得、スポーツ活動に充てる生徒への対応ができるということがある。
- ・商業、工業等の専門学科の教員不足が課題になっている。大学に進学し、いずれは教員として帰ってくるよう指導しているが、基本的に高校卒業後は就職を考える生徒が多いという現状は変わらない。普通科の生徒は多くが大学へ進学することから、是非とも商業、工業等の教員を目指してほしい。そのために、高校在学中に職業学科で学び、単位を修得できるような仕組みの構築ができないものかと考えている。
- ・普通科から就職を希望する生徒も一定数いる状況があるので、普通科の中にも希望に応じて職業教育の基礎を学べるような科目を設定することで、就労後に生かせるのではないかと考えます。
- ・学校規模が小さくても学校行事は大規模校とほぼ同じようにある。しかし学校規模が小さくなると教員数は減るため一人当たりの業務量は増える。そのような中で地域との連携となると、さらなる業務量が増えてなかなか手が回らないのが現状である。働き方改革が叫ばれている中、小規模校の在り方について特に検討いただきたい。
- ・定員充足しにくい学校では、いかに中学生とその保護者、中学校教員に特色・魅力を伝えることができるかが大切になってくる。中学生からみた魅力の観点についても研究が必要かもしれない。

④入学者選抜の在り方について

- ・特色選抜において、各校の特色を出す難しさ、問題作成にかかる各校の負担、特色選抜・一般選抜にかかる業務量の増大など、教職員の働き方改革の点から課題が大きいと感じている。現行の良さを残しつつ、課題を解決できる方法を早急に検討すべきであると思う。
- ・将来を見据えると、県立高校の在り方と入学者選抜制度はパッケージで検討する必要がある。一般的に入試方法が複数あると、現場では対応に苦慮し緊張感が増すことになるので一般入試のみで選抜されるのがよいと考えるが、学校ごとに求める生徒像が違うことから、その学校に合った入試方法が選択できるとありがたい。
- ・教育課程が異なるにも関わらず、ここ数年「第一希望・高等養護学校、第二希望・高等学校」という生徒が増えてきている。高校における特別支援教育のニーズの高まりも含め、こうした課題に向きあう必要がある。
- ・軽度の知的障害のある生徒の中でも、多くの方が高校に入学されています。そのことも含めた入学者選抜の在り方は今後検討していただきたい。

(県立学校副校長・教頭)

<「IV 将来を見据えた整理」について>

①県立高等学校と私学との関係について

- ・建学の精神が多少異なっても、近隣の公立・私立は部活動のみならず、普段の授業や地場産業等をベースにした学び、インターンシップ等でも幅広く手を携えて切磋琢磨していけることを望みます。
- ・令和4年度県立高校第1学年募集定員を7月に公表されたのは、各校が来年度に向けた取組がいち早くできることから良策であった。私学と共存しながら中学校へのアピールがしやすい。
- ・私学は、新しい校舎で教育設備も整っているイメージがあるが、県立高校の中には校舎・施設設備とも老朽化しているところもある。各校で特色を出して魅力ある学校づくりに取り組むことはできるが、ハード面については学校努力ではどうにもできない。校舎の建て替えや施設設備の充実を行い、ハード面の格差を極力なくした上で、公立・私立も含めた中から中学生に選ばれる魅力ある学校づくりをしていく必要があるのではないかと。
- ・本県では、生徒数が減少しても私学は募集定員を減じないので、県立高校がその調整弁を担っている。県立高校のみが募集定員を減じ続けていけば、いずれ限界を迎え、公私による「パイの奪い合い」となることを危惧する。それを回避すべく、公私立高等学校協議会で公私比率について踏み込まざるを得ない状況がくると思う。
- ・募集定員を充足しない場合、学校が掲げる教育目標に取り組むことに優先して、生徒指導の課題解決に時間が必要になります。そのような状況を生まないためにも、私学との連携を十分に図り、各学校が掲げる目標に不安なく取り組める環境を整備する必要があると考えます。
- ・以前に比べると最初から京都を含めた近隣の私立専願という生徒が徐々に増えてきている傾向があるように感じています。学習塾における進学指導の影響がかなり大きいことを踏まえて、学習塾にも情報提供するなどして理解を求めると必要なのではないでしょうか。
- ・私立高校は特色ある教育を行っていて、県立高校もそれに負けないように工夫が必要だと考える。思い切った取組ができるように柔軟な対応とサポートを望む。

②県立高等学校の学校規模について

- ・多様性のある社会で生きる力を養うことを考えると、大規模校を増やすことが望ましい。色々なことを柔らかく吸収しやすい年齢期に、学校教育活動（部活動や行事含む）を通して多くの人やその価値観に接する環境は必要。
- ・部活動において、地域内の学校で活動種類を選択し、地域で一つの組織・チームとして活動するようにしてはどうかと考えます。生徒は地域の学校の専門性・特色で選択し入学し、部活動や行事などは拠点校を作り、地域で支え

- る形です。地域と一体となる県立学校づくりが地域協働につながると思います。
- ・小規模校における大きなデメリットは、他校との競争が半々部活動のような取組にあります。個人競技を主体とした部活動を取り入れたり、他の学校にない部活動を取り入れたりすることで、活性化につながることもできると思います。このような対応を考えれば、大きなデメリットといえる部分も克服することができ、小規模校であっても十分やっていけるものと思われます。
 - ・学級数の減少に従って教員数を減じると、部活動をはじめ生徒が求める活動を充分に行えないことになる。各学校で特色ある取組を行うために、県の財政が厳しい中ではあるが、1学級の生徒数を減らし教員数は減らさない等の措置を講じる必要があるのではないかと。
 - ・現在、県内の状況は、地域密着型の学校も多く、それぞれの学科が特色を活かしながら魅力ある学校づくりを進めている過程です。そのような中で無理な統廃合を進めようとする、県民や地域住民、統合対象になった卒業生からの賛同が得られないかと推測します。よって、学科の特性等を考慮して、段階的に35人学級の実現を「県独自の教育政策」として推し進め、実現して頂きたいと思っております。
 - ・普通科高校では、一定の学級数がないと生徒の協働・競争による効果や部活動の成立が困難と考えられる。
 - ・地域の中に学校が入っていくだけでなく、地域が学校の中に入ってくる（空き教室を利用した保育やディサービスの実施、図書館などの共有等）という視点をもつことで、多様で実践的な学びの実現につながると思います。
 - ・学科やコース、あるいは系列の違う小規模校が一つの学校に合わさることで、多様な専門性を持つ教員による集団が生まれ、生徒の学びの世界が大きく広がり、教員や施設といった資源をより有効活用できるようになると考えます。小規模校の「時代に即した魅力的な学校づくり」を考えた時、小規模校が合わさること（合併・統廃合）で、むしろ大きな成果を生むことがたくさんあると考えます。

③将来に向けた議論の必要性について

- ・今後、高校数や学級数の維持は一層難しくなることが予想されます。しかし、このまま現在、学校にある物的・人的資源がすたれていくのは教育の質の大きな低下を招きます。多様な生徒が集まって学びあう高校をつくっていくために、学校の敷地や設備、教職員を簡単に切り捨ててはならないと考えます。教育は未来をつくる事業です。それだけに未来をどのように築くのか問われているとらえています。
- ・子どもたちを取り巻く環境は、日々変化しています。5年といわず、2年もすれば大きく変化しているように感じます。その状況に、私たち大人、教育に携わる者が敏感に反応し、新しいものを取り入れながら、これまで受け継いできた教育的財産を大切にすることが求められていると考えます。
- ・学校での学びが社会とつながっていることを感じられるようになれば、もっと多くの子どもたちが生き生きと学校生活を送れるようになるのではないかと。
- ・小規模校を一つの「高校」とみなすことについては、先進的な取組であると思うが、一方で、そこに勤務する教員が、一つの「高校」としての教育目標に向かって教育活動を展開するためには、かなりの議論を要する。
- ・「規模の小さい複数の学校を一つの学校と見なし・・・」は、画期的なアイデアとは思いますが、ICT活用で人の移動なくいろんな活動が実施できるかと思いますが、反面それぞれの学校間の教員や生徒の移動（学校行事、部活動等）がないなら、教員や生徒の帰属意識が高まらず「一つの学校」とはほど遠いような気がします。
- ・高校のゆるやかなグループ化により、かえって各々の役割や特徴を際立たせることができると考えます。
- ・午前中は学校やオンラインでの授業を展開し、午後は選択的な活動（他の学校への選択科目、部活動、ボランティア活動、実習等）を行い、生徒自身にキャリアを追求させ、それぞれのニーズに応じた科目編成を行う。
- ・部活動については、グラウンド等の施設を民間企業に貸出し指導を委託し、複数の学校から生徒が参加してチームを作って活動する。規模の小さい学校はサテライト校のような機能を持たし、ICTを活用して複数の学校の授業が受けられるようにして、学校行事等必要な時に本校に行くなどが考えられる。また、現在の通信制の学校をICTの活用で特化して、新しいタイプの学校を作るなど、発想の転換が必要ではないでしょうか。
- ・身近にある高校が、退職後や社会人にとって再度学びの場としてその役割を担っていくことができないだろうか。企業など多方面と発展的に連携していくことができれば、高校の新たな役割が開かれると思う。
- ・ICT機器の活用が必須となっていく教育現場において、時代に即したネットワーク環境（インフラ環境）を絶えず見据えた上で計画的に維持・管理・更新する必要がある。学校において必要なものかどうかを議論して、環境整備を進める必要がある。
- ・GIGAスクール構想による急速なICT化とこれを活用した学習活動は、これまでのアナログ的な学習活動よりも、その準備に相当な時間を費やす。現在の社会情勢を鑑み、ICTを活用した学習活動は教育の質を高めるうえで重要な役割を担っているが、「働き方改革」と一貫性をもった形で進められることを望む。
- ・学校の活力を生み出すために、専門学科高校はその専門性をアピールし、普通科高校は授業に特色を出す等が必要だと思います。
- ・各学校の魅力化を図っていく際に、学校が主体的に取り組んでいけるような仕組みが必要ではないかと。
- ・総合学科や専門学科の学級定員の見直しを図り、きめ細かい指導が行き渡るような学校づくりも必要ではないでしょうか。
- ・1人1台端末といわれているが、現在の教室の机ではPCや教科書等を置いて学習するにはスペースが狭い。1学級が少人数となれば教室が広くなり、併せて机を大きくすることもできれば学習しやすい環境になる。
- ・地域によっては生徒数の減少が著しく、30人学級の推進と教科担当者の必要最低人数の確保が必要である。
- ・小規模校が小規模校ならではきめ細かな取組を行うにしても、まずは大規模校と同じ一通りの校務をしなくてはならないので、きめ細かな取組をするには教員数が足りず、数少ない教員一人ひとりが多くの仕事を抱えて疲弊し

- て活力を落としているというのが現状。よって、県立高校の在り方を考え改革を進めるには、人的措置や環境整備、財政的支援については一律に取り扱われる「平等」ではなく、地域差を考慮した「公平」が必要。先行して県内周辺部の小規模校だけでも30人学級にする等、柔軟な取扱をしても良いのではないかな。
- ・学校の立地条件も高校選択の上での大きなポイントとなります。特に人口が少ない地域の高校において、他地域から生徒を受け入れるには、駅からの交通手段の確保も必要になると思います。
 - ・将来は、卒業まで同じ校舎で学ぶことや学年制に固執せず、科やコースを変更したり、予備校や専門学校の役割も果たせる高校になっても良いと考える。
 - ・各校で取り組んでいる素晴らしい授業や実践等を、予備校や塾の衛星授業のようにカリキュラムを配置して、生徒が選択できる、学校が選択できる仕組みがあっていいと思います。
 - ・各高校が主体的に「スクールポリシー」を作成する必要があるが、県教育委員会も各高校を今後どのように発展させていくか（特色を持たせるか）原案をもち、校長と協議をしながら、どの高校も同じ教育活動とならないようにする必要があらうと考えられる。
 - ・授業についても、「特色ある選択科目（芸術や体育、語学、探究的な学び）」については、連携校ならどこでも学べるような仕組みを作っていくことも模索してはどうだろうか。
 - ・県立学校の編入学や転学を柔軟化し、学力や人間関係等でつまずいた生徒を県全体で支援できる高校教育を実現する。
 - ・行政機関、地域住民、産業界、大学等との連携・協働を推進するためには教員の分掌業務だけでは負担が大きく、是非ともコーディネーターの配置をお願いしたい。
 - ・校則の見直し、生徒指導の在り方、部活動の在り方など大きな転換期に来ているのではないのでしょうか。生徒を管理する教育は限界ではないのでしょうか。いままでの価値観では限界がきているように思います。
 - ・地域連携の一つのきっかけとしては、同窓会に積極的に学校に関わっていただくことも良いと考えている。
 - ・「障害のある者となない者が互いに学びあい互いを尊重する」交流的な観点にスポットを当てながら、高校3年間だけでも、多様なメンバーが同じ学校の敷地でそれぞれの能力に応じて学習できるシステム作りを望む。
 - ・特別支援教育は、その専門性と継続的な支援および教育が必要です。多様化する障害の状態に対しての対応を踏まえて、高校ではハード面・ソフト面の両方を整えることが重要であると感じます。
 - ・小規模校に、特別な支援を要する生徒への対応に長けているという特色を出していただけるとありがたい。特別な支援を要する生徒の多くは「大集団」が苦手な者が多く、それが登校できない、授業に入れない等の一つの原因になっている。小規模であれば、そのハードルが下がる。
 - ・特別な支援を必要とする生徒は、障害のある者だけとは限らず、不登校や家庭困窮、精神的な心の病のある者等多様化しており、そうした生徒への対応の整備も必要であると考えます。
 - ・県の方針に従って、小中学校の多様性と高校の専門性を高め、「6・3・3の12年間で滋賀県の人材育成を図る」意識を強く持つことが重要。県立や市町立の枠を超え、「滋賀県が育てたい生徒像」「高校が求める生徒像」をもとに、小中学校において多様で計画的な教育と段階的なキャリア教育・進路指導を行うこと、その中で人材交流も図りながら小中高がお互いをさらに深く知り協力して教育にあたること、その過程や成果について適切な広報を行うことを実践できれば、さらに連携が強化でき、それが滋賀県の人材育成につながるのではないかな。
 - ・あらゆる職業領域・分野において、スペシャリストの卵を養成できる、また、スペシャリストの心意気を持った若者を養成できる教育体制の構築をお願いしたい。
 - ・教師だけが指導に携わる教育から、CSや民間企業等、教師とは異なる知見を持つ方々とも連携し、画一的な内容を教える教育から、個々の特性に応じた教育へ移行していくことが重要と考えます。
 - ・様々な事情を抱えた生徒がいるからこそ、高校だけの解決は困難。いろんな関係機関との連携を積極的に取り、10年、20年後の生徒の成長を考え、地域全体で見守る体制づくりが一層必要になってきている。
 - ・民間企業の方であっても、基準を満たしていれば生徒を教えることに参加できる仕組みも必要ではないかな。民間で積み上げられた経験と実績をもとにして指導していただけることは非常に有意義である。慢性的に人材不足（免許保持者が少ない）の工業学科において、この仕組みを拡大していくべきと考える。
 - ・全県一区になった今でも、地域に根ざした高校は必要であると考えます。希望していないのにやむを得ず地域外の高校へ通うという生徒はできるだけ少なくしたい。そのためにも、地域内に専門学科を増やすより、普通科のままで特色化を進めるのは賛成である。
 - ・全ての普通科に地域の実情に応じたコースや新学科等を設置することで、学校の特色が明確化され、県民からも理解が得られやすく、これまで以上に高い目的意識を持って入学する生徒が増えるのではないかな。
 - ・例えば、(仮称)「琵琶湖学科」(農林工商水産、文理の枠を超えて、幅広い具体的な地域課題の解決を学ぶ)等、本県ならではの想定も記載してはどうかな。
 - ・交通が不便な地域で、地元からの入学生が多くを占める普通科高校については、学校を存続させながら地域とのつながりを学校の特徴にして教育課程を編成するなどの工夫を進めていく。
 - ・生徒対象のアンケート結果によると、多様な学びや主体的な学びを重視する必要性を感じた。総合学科系列の枠を越えた自由選択科目の設定等を工夫したい。
 - ・多様性のある社会を目指すためにも、外国籍の生徒理解や学習支援の充実について、学校のみならず地域全体の意識向上が必要であると考えます。
 - ・教育的支援の必要な生徒が増加する中、今以上に多様な学び方を充実させる必要がありますが、今のままでは配慮を充実させることは難しいです。予算や人事面での配慮を同時に進めていかないと、一部の学校だけがうまくいくということも出てくる可能性もあります。

- ・学校規模にかかわらず、多様な業務がすべての学校に同様に課せられており、教員数の多い学校であっても少ない学校であっても多種多様な業務を担っています。近隣の数校の業務をまとめたり、広域の学校の業務を外部に委託する等、働き方改革の観点からもこれまでにない業務の形が探れるといいのではないかと考えます。
- ・学校統合について前向きに考えていくには、全教職員、そして地域の人々に今後の生徒数の減少について積極的に伝え、どのように対処していくべきか共に考えることも有効かと思われる。
- ・地域連携については、全県一区制度で通学する生徒が、学校の所在地を「地域」として取り組むとなると難がある。小中学校のように、それぞれの学区から通学するのであれば地域のことも理解し愛着もあり取り組みやすいが、高校生に地域での活動や取組となると地元の企業等となる。
- ・スマホ所持率が高くなり、学校から発信する情報やその方法は十分考慮して行う必要がある。一方、卒業生や在校生から発信された個人的なTwitterやブログ、口コミ等のSNS情報、塾や予備校での評判等の方が、学校から発信されるオフィシャル情報より信憑性をもって伝わってしまう可能性が高いのではないかと。
- ・「学校の魅力化・魅力発信」を各校・各教員が「自分事」として考え、主体的に取り組むかに成否が分かっていると感じています。
- ・湖北地域、湖東地域では、それぞれ統廃合をしたことで活性化している。甲賀地域についても何らかの措置を施さないと、今後、魅力のない小規模校ばかりとなり、大津、草津方面への生徒流出は止まらなくなると考えられる。取り返しのつかなくなる前に、湖西地域並みに力を入れた魅力化が必要である。
- ・職業教育においては、産業社会に近い環境づくりが必要となると思われます。各校目指すべき方向性は明確にしつつ、現代の高校生の課題と思われる実社会での様々な人とのかかわり、バーチャルではないかかわりと豊富な体験が求められると考えます。

④入学者選抜の在り方について

- ・特色選抜に関する業務が煩雑であり、メリットがあまり感じられない。問題作成の在り方も迷走しており、本当に多様な生徒の能力をはかることができているのか疑問が残る。大学入試を参考に、推薦入試等では各高校の裁量を今より増やして、選抜方法の多様化（講義の後のレポートなど）をはかってもよいのではないかと。
- ・各校の魅力化方策に該当する生徒であれば、他県から募集してはどうかご検討をお願いしたいと思います。
- ・入学者選抜改革を行うにあたっての最大の課題は、「採点」すなわち「教育評価」の教員のスキル不足があげられる。教員のリカレント教育として「教育評価」のスキル向上がなければ、入学者選抜の改革は採点・評価の場面で実効性が伴わなくなる。「パフォーマンス評価」の研修を全ての校種について実施することで、入学者選抜改革だけでなく新学習指導要領への対応、低迷する学力テストの改善に大きな成果を上げることが期待できる。
- ・特色選抜の作問が非常に労力を要する。特定の教員に負担がかかっているのが現状である。
- ・中学生と高校が1対1に近いやり取りを行うスポーツ系の推薦選抜で合格を決めた生徒は、入学後充実した高校生活を送っている。また、そういった覚悟を持って入学した生徒が周りに与える影響も計り知れない。そこで、推薦入試の募集枠をもう少し広げ、余裕をもって合格できる様な体制を作ってはどうか。

(2) 市町立中学校長・義務教育学校長

<「IV 将来を見据えた整理」について>

①県立高等学校と私学との関係について

- ・各私立高校は、それぞれに特色を明確にしつつある。私学独自の建学の精神に基づくものでもあることから、県立高校との「違い」を明確にする点では良いことだと思う。県立高校の「特色」を県全体として整理し、単純に入学生徒の取り合いとならないことが必要と考える。
- ・これまで各校が、工夫して特色を出してこられたが、代わり映えするものではなく特色に欠けていると思います。それに対し、私立高校の特色ある学校づくりは明確であり、魅力的なPRを進めておられると思います。県立高校も思い切った独自性の中で魅力ある高校づくりを進めていただきたい。
- ・私立には、特別進学クラス、普通クラス、スポーツクラス等分かれている学校も多数あり、実績を残していることを考えれば、県立も何校かはそのような特色を出してもいいのではないのでしょうか。
- ・私立高校の教育環境等が充実し、入試説明会に参加するだけでも学校全体の活力、向上意欲、勢いを感じる。県立高校の魅力は安さだけのように感じる。
- ・進路説明会や体験入学で、中学生やその保護者に何をプレゼンするのが重要である。その学校、学科での学びこそが、今求められているものであり、そこに学びの楽しさや喜びがあることをしっかりと伝えてほしい。比して私立高校のプレゼン力は高いと感じることが多い。

②県立高等学校の学校規模について

- ・規模以外に地域性も大切であり、その地域に高校がなくなることでデメリットも大きく、大きさはともかくなくせない高校も存在する。
- ・安易に小規模校を廃校にするのではなく、大規模校にはない小規模校ならではのメリット（教育課程・学習環境・施設設備等）、魅力や特色を強く発信することで、小規模校への進学を積極的に選択する生徒を増やし、そこで学びを充実させてほしい。
- ・これまでから生徒数の減少を見据え、特に現在の小規模校の存続に向けて様々な工夫をされておられるが、そのことが大きな改革であると保護者や地域等に伝わっていない、発信しきれていないように感じます。
- ・今の二極化（簡単にいえば人気のある学校とない学校）の傾向を解決するには、学校規模に関わらず特色ある学校

- づくり（魅力化）をいかに推進するか以外にないのではないのか。現状として、各高校の魅力が生徒たちに十分に伝わっていないし、それどころか実際に魅力のない学校が多いと思う。各校の今後の努力に期待したい。
- 段々と募集定員が減少し生徒数も少なくなる中で、規模の小さい中で生徒の活動よりは、統合等により、より多くの生徒の活動がある方が学校自体の活性化や部活動の活性化に繋がると考えます。
- 生徒数の減少に伴って、特に普通科は大規模校から定員を減らしていけばよいと思う。専門学科は総合学科に統合し、コースでの存続とすればよい。
- 地域性や規模の大小による公教育の格差や不公平感が大きな問題だと思います。県全体として、学校規模のある程度の平準化や適正化を進める必要があると考えます。
- 普通科の学校規模をすべて同じ程度（5～6学級）にし、南の学校に生徒が集中しないようにする。このことにより、特別活動等においても全ての学校が同様の活動を行うことができるとともに、地域の学校としての機能も発揮でき、廃校にすることなく存続させていけるのではないかと考える。

③将来に向けた議論の必要性について

- 全県一区でどの学校でも受検できるようになっていることは、生徒にとって選択の幅が広がり、望ましいことであると考えます。
- 生徒が地域から流れることを懸念して学区制をとるべきであるという意見もあると聞いていますが、個人的には高校を残すために学区制をとることに反対です。学区制を取り入れるまでに、高校を残す方法を十分検討し努力を尽くすことが大人に求められていると考えます。高校があるために人口流出が抑えられる議論もあるかと思えますし、近くに学校があれば生徒の負担は減るかもしれませんが、学区制の議論とは別だと思えます。
- 学校は、これからの社会が必要とする人材を育成する場であるので、育成すべき生徒像や役割は時代の変化に合わせて変わっていくべきものだと思う。高校の教育課程や特色も、社会が向く方向に沿うように、生徒の願いを組み入れながら変化していく方が望ましいと思う。滋賀県で進められている高校再編計画では、生徒の多様な学びを実現できるように取り組まれていると感じている。
- 高校は県立であるが、各市町にとっても重要な教育活動拠点であり、市町の関係者と連携しながら高校の在り方について議論することは特に必要である。
- 地理的なハンデを抱えた生徒もいることを考慮して、安易な統廃合等は控えてほしい。
- 複数の高校を一つの高校とみなして授業の選択幅を広げることで、生徒の多様なニーズに応えることができ、学ぶ意欲につながり、個々の能力をより伸ばすことができるのではないかと考える。
- 少子化に伴う県立高校の規模縮小や再編は避けられない。ただ、規模縮小や再編が進められることで、遠い高校への進路選択を余儀なくされ、その結果、学力面や経済面で進学を断念せざるを得ないような状況が生じることは絶対に許されない。その意味で、小規模校を一つとみなして学びの場を減らさない考え方はありがたい。
- どの県立高校も地域になくしてはならない存在なので、キャンパス校の案は1つの解決策だと思います。
- 県立高校において、特別な支援を必要とする生徒や不登校生徒の受け入れを明確に打ち出していただけのような学校をつくるなど、多様な学習ニーズへの対応を打ち出すべきではないか。
- 高校における『特別支援教育の充実』をお願いしたい。併せて、全県的には自閉・情緒や発達障害により生きづらさを感じる生徒の増加がみられますので、県立高校併設型の『高等養護学校の拡大』を強く望みます。具体的には、募定の削減により小規模化した高校での導入ができればと考える。
- おもしろい学校改革が必要な時期にきていると思います。また、高校の出口教育として日本の大学制度の在り方についても、あわせて議論が必要に感じます。
- 中学校等卒業生の99%が高校等へ進学するので、高校中退はできるだけないようにしてほしい。また学力による高校間の格差があってはならない。そのことも踏まえ、各高校の役割や特色を持っていただきたいです。
- 高校は義務教育ではないが、入学させた生徒は責任を持って卒業させるための支援をお願いしたい。
- 高校のキャンパス化も魅力的だが、極端になりすぎると中学校から高校へのプロセスが離れてしまうことも考えられる。それよりも中高のつながりや交流、地域の良さを活かした連携の場を大事にしていきたい。
- 高大連携は行われているが、中学と高校との連携はあまり行われていないように思われる。体験入学などの交流はあるが小規模で単発的であり、もっと高校での学習を入学前に知らせる機会があればよいと考える。
- 中学校側からすると、私立高校の担当の先生の方が中学校によく訪問される印象があります。お互いのことではありますが、できる限りの中高連携が望まれます。
- 中学校側からすると県立高校の変革を保護者・生徒へどう発信するか、中学校の進路指導をする教師集団がしっかりと情報を吸収できているかが重要になってくると感じている。初任者研修で高校での研修があるが、中学校の教職員が県立高校の姿をしっかりと知り、適切な進路指導を行っていくことも重要だと感じた。
- 同じような学科をそろえるだけでなく、ここにしかない学科を作り他との差異化を図るとか、特定のスポーツに特化した学校を作るとか、まさしく「これをするならこの学校」というものが見えるようにすればと感じます。県外や私学に進学する生徒は明らかな目的意識をもっている子どもたちばかりです。
- 高校は、社会への直接の出口という視点を明確にして、ある分野に特化した学校づくりを進める高校があってもいいと思います。「あの高校へ行けば、この学びができる」ということを明確にし、その結果、卒業後はこんな道に進めるということが「売り」にできる学校づくりをしてほしいと思います。
- 定員を5年程度満たない普通科高校は廃止して、近隣の県立高校普通科の定員を増やす等により継続維持することの方が合理的であろう。それでもなお地域の高校を存続させる必要があるとするなら、県と市町との組合立の中高一貫教育校をつくって、地域がその維持のための財政的負担をすればよいと思う。

- ・今後の生徒数の推移を見ると、将来的には高島市内の県立高校は1校になると予想されるので、早くからその改編計画等を準備・検討いただきたい。たとえ1校になっても、特色ある教育活動が展開され、地域の人材を育成し、将来的に地域に戻って地域に貢献する人材の育成につながるような学校経営を期待する。
- ・今後、生徒数減に合わせて、計画的に高校の統廃合を進めていくことは必要だと考える。この場合、例えば同一校に商業学科と普通科が同居するケースや、総合学科に「進学に特化した科」を併設するなど、学校数を減らしつつ、地域や生徒のニーズにきめ細かく対応する統廃合を求めたい。

④入学者選抜の在り方について

- ・中学校での職業体験学習のような形態をとった、希望する県立高校での「1週間程度の体験入試」を行うことで希望する生徒と高校とのより具体的なマッチングが実現し、入学後の不適応の減少にもつながると考える。
- ・現行の特色選抜については、選抜機会が増えるものの、青田狩りのイメージが強くないと考える。また、スポーツ・文化芸術推薦選抜は、推薦選抜の枠内に入れればよいと考える。
- ・特色選抜で内定された者は、その後の学びで何かのメリットがあったのか不透明で、この制度の有用性を見いだせない。是非とも再考いただきたい。
- ・特色選抜は倍率が高く、選抜の方法を考えていかなければならない時期にきていると思います。
- ・特別支援学級に在籍していた生徒（特に自閉・情緒）の進学先として確保できるような入試制度が整えられるとありがたい。
- ・県立の推薦・特色選抜と、私学の入試が近すぎるように感じています。この時期に体調を崩した生徒は、2つの入試に影響してしまいます。
- ・入試制度の改革を進めていただきたい。特にスポーツ・文化にかかる推薦入学制度は、過度な部活動の強要につながりかねない。
- ・近年、中学校の部活動に所属せず、地域のクラブチームに所属して活動する生徒が増加しています。推薦選抜において、そういう生徒の扱いがたいへん複雑で困難さを感じています。また、推薦選抜、スポーツ・文化芸術推薦選抜、特色選抜で内定する生徒が増え、一般選抜を受検する生徒の数が少なくなり、3月までの学級指導が困難です。時期的なこともご配慮いただくと現場としてはありがたいです。
- ・県立学校は、募集定員に満たなければ全員合格となる。これが高校への進学率、入学後の生徒の学習意欲、生徒指導体制等に影響を与えていると思います。地域性等様々なことを考慮した中で各校の定数等は設定されていると思いますが、一定の基準を設定することはできないでしょうか。

<これからの県立高等学校の在り方全般について>

- ・中学校における進路懇談会で、「とりあえず普通科へ」や「どこの高校だったら入れますか？」という言葉が最近よく聞く。しかし、「将来のことを考えて、〇〇に熱心な高校」「大学へ続く高校をめざしたい」という声も少なくはない。やはり、学校の特色や実績は保護者や生徒の心に響くものである。
- ・コロナ禍の学校教育活動で一番の課題は、人とのつながりと出会いを制限されたことと痛切に感じている。高校においても「人とのつながりや出会い、新しい環境との出会い」等を学校教育活動に取り入れて「人づくりのための養い」を行うことも在り方の柱になると考える。就職率、進学率も在り方の柱の一つであるが、「人としての豊かな成長を促す」教育活動にぜひ、じっくり取り組んでほしいと考える。
- ・科学系の学びができる場（高校、学科、コース、課程等）が少ない上、地域が限られ偏っている。多くの高校、どの地域でも理数教育が受けられるような方向性が必要である。
- ・中学生にとって魅力があり、特色ある学校の創造に向けて、普通科でのコース設定をさらに推進してはどうか。（例えば、今あるコース以外に、教員養成コースや医療型養成コース、留学コース、ITコース等）
- ・生徒数減少地域にある高校では、さらに特色があり魅力ある学校づくりを進めるため、これからの社会のニーズに応じた学習ができる「新学科」を設置（例えば、国立工業高等専門学校並みの高度な情報処理（特にプログラミングやAI）や工業技術、新しい農業や林業が学べる科等）することが必要かと思えます。
- ・キャリア教育の充実について書かれている部分は、ぜひ実現し活性化してほしいと思いました。特に、近年、若い世代の不安定就労や転職を繰り返すなどの実態があるなかで、将来の生き方を考え、それを進路選択につなげられるような指導がより一層望まれます。
- ・生徒は、専門学科やバカロレアはどのような内容の学習をするのかイメージを持っていない。イメージがない中で体験入学に参加をすることはなかなか難しいので、授業で使える専門学科やバカロレア等の紹介動画（学校の紹介動画とは別に）があると、生徒にイメージを持ってもらえ体験入学にも参加しやすくなるのではないかと。
- ・県立高校ごとの設置学科や特色等については、中学校での紹介や発信等は行っているが、県立高校自体の情報発信に独自性がなく、生徒や保護者に十分に伝わっているとは言えないと考える。
- ・各校で特色ある学校づくりを行っているが、進路選択において立地によるところは大きい。通学方法は保護者や生徒にとって進路選択に大きく影響する。スクールバス導入等、大胆な改善策が必要ではないか。
- ・学力によって選択する高校がある程度決まってくる現実がある中で、本来希望していない学校を選択せざるを得ない生徒も多々いる。様々な学力層や状況の生徒が高校進学に希望が持てる工夫をお願いしたい。
- ・昨今、小中学校ではCSの取組が盛んになり、より一層、地域と密着した特色ある取組を進めています。地域の方が、おらが学校の気持ちで支えていただけようになってきたことや、子どもたちの郷土愛の育成にも寄与するなどの効果が見られます。高校再編にあたっては、地元首長等との協議等を経て、地域と連携した特色ある高校を視野に入れた取組も考えていただきたい。

- ・CSの取組は、県立高校でも進められている状況であるが、まだまだ学校によって差異がある。地域の学校としての県立高校の位置づけや、地域住民の関心の高まりを活性化することが重要である。
- ・産業界で求められる知識・技能を育成するために、地域連携によって産業界から専門的な指導ができる人材を活用し、特色あるコースや学科において質の高い教育、生きる力を育成する教育を行っていくことが必要。
- ・職業別や専門学科別のインターンシップ制度や、英会話教育に特化したプログラムなど、具体的かつ体験的な独自の教育課程編成をめざしていただきたいと考えます。
- ・何を学ばばいいのかわからない子どもや大人が多い中で、科を選択させる困難さが課題である。特色ある教育課程の提示が必要ではないか。
- ・目的を持って職業学科に進学した生徒の満足度は高いようので、次代を見据えた教育課程の工夫等を推進しさらに魅力を発信していただけたらと考えます。
- ・高校は中学校よりもより高度で充実した授業が受けられると思い進学したが、実際には体験等のない黒板だけの授業であったり、ICT環境も中学校より悪いということ卒業生から耳にすることが多い。
- ・中学校と高校が切れ目ない支援教育を進めていくためにも、不登校傾向の生徒や特別な支援が必要な生徒について綿密な連携が必要であると考えます。
- ・特別支援学級在籍生徒の高校進学が増えており、学力的に高くても支援の必要な生徒も多い中、高校でも通級指導教室を増やすとともに、特別支援教育を充実させる必要がある。
- ・知的障害のない自閉症・情緒障害学級に在籍している生徒は、特別支援学校に進学できず通常の学級に在籍している生徒と同じように進学せざるを得ない。これらの生徒に生きる力を育むため、少人数学級を導入したり、特別支援教諭免許保持者やスクールカウンセラー、日本語指導者等を配置した学校をつくることも学校の特徴となり得る。生徒一人ひとりに手厚い教育を求める生徒、保護者は少なくない。ぜひ検討していただきたい。
- ・地域によっては、外国籍生徒が非常に多く日本語の習得が不十分な生徒も多いのが現状です。その中で、現状の県立高校で進路先として考えるときに、「行きたい学校」より定員等を考え「行ける学校」を選択することがあるように感じます。その状況で、「外国籍生徒が学びやすい科」が県内に数か所でもあれば、「ここに行きたい」という生徒が増えるのではないかと思います。
- ・これからの普通科を魅力あるものにするためには、1つは学級定数を見直し、大学のゼミのような専攻別の少人数クラスを編成していくこと。そうすると、それぞれのニーズに合った(英語を勉強したい、基礎的な学力をつけるために学び直しがしたい、資格を取りたい、企業のインターンシップがしたい)等の対応が可能となる。
- ・オンライン学習を中心に学びを進めていくタイプの学校ができないだろうか。毎日学校に通うことが難しい生徒が増えている傾向を感じています。
- ・全県一区とはいえ、湖東地域では公共交通機関等通学の関係で、多くの生徒が近隣の高校へ進学する傾向がある。また、地域における高校としてその役割を担っている学校もある。

(3) 私立高等学校長 等

<「IV 将来を見据えた整理」について>

①県立高等学校と私学との関係について

- ・中学3年生減少期を迎え、定員減を私学に要請されようとしているかもしれないが簡単には首肯できない。私学の定員は、県私学審議会の慎重審議を経て、知事の認可で決められているので、教育委員会が毎年県立の定員を見直されるようにはできないシステムである。また、定員を減らしたことによって生ずる、急な教員減は雇用の観点から言ってもハードルが高い大きな問題である。県立、私立の定員を見直す議論の必要性は否定しないが、県外私学(主に京都中学・高校)等に流れる生徒をいかに止めるかを考えるのも大事だと思う。
- ・いずれも公教育を担っている立場から、今後の入学対象生徒の減少を鑑みて何らかの形で募集定員のあり方について検討していく必要があることは確かである。しかしながら、私立高校は独自の建学の精神に則り、特色豊かな学校経営を展開するために定員を設定し、安定した学校経営に努めている。そのような状況において単に定員を減数するとすれば、学校経営上死活問題となりかねず、この問題を軽々に論じることは時期尚早である。

②県立高等学校の学校規模について

- ・規模の大きい高校、小さい高校とでそれぞれメリット・デメリットがあげられているが、生徒一人当たりの必要経費を考えると、小規模校のメリットよりデメリットの方が大きいのではないかと。公私比率等の議論を行う前に、今一度、統合を視野に入れた県立高校の改革が必要ではないか。

③将来に向けた議論の必要性について

- ・いくつかの高校をつないでキャンパスと見立てる取組は良いかと思いますが、学校だけをつなぐのではなく、地域や社会ともっと積極的につながるような仕組みやダイナミックな発想の転換が必要だと思います。
- ・思い切った学校再編や廃止を断行され、その受け皿として私学を利用していただきたい。

④入学者選抜の在り方について

- ・教職員の働き方改革もいわれており、複数機会を与える路線を変更し、もっとシンプルな入試でもいいのではないかと感じている。